

子どもたちが協働する良さを実感することを目的にした算数科における授業実践

令和3年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 教科教育実践高度化コース

塘居 宗一郎

実践報告書要旨

現在、グローバル化や、性別や年齢を問わない社会参画が促進され、多様な他者と協働してその状況における最適解を生み出さなければならないような知識基盤社会となっている。中央教育審議会(2021)は、このような社会において求められる資質・能力として、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力や、対面でのコミュニケーションを通じて人間関係を築く力、困難を乗り越え、ものごとを成し遂げる力などを挙げている。今回実践を行う学校の子どもたちは、「協働的な学び」の機会を得ることや、他者と協働したいと思える経験が少ないことがうかがえた。そこで本実践では、算数科において教師が子どもたちに他者と協働する場を設け課題を提示することで、誰とでも関わる力を養い、自分の理解が深まる経験から他者と協働することの良さを実感させることに焦点を当てて実践を行っていくことにした。本実践では、「協働」とは、「文化や環境、立場の異なる他者と、一つの目標を達成するために対等な関係で協力して働くこと」、「協働的な学び」とは、「文化や環境、立場の異なる他者や、同じ立場にいる仲間が、互恵的相互依存関係を持って、個々人や集団の目標を達成するための学び」と定義した。

第4学年「面積」における実践において、本時では、答えが一つに決まらず多様に出るような課題を提示した。自分の力でどこまでできるのかを知るために個で取り組む場面を、より多くの考え方を知る経験を得て自分の考えを他者に言葉で説明するために協働する場面を、協働することの良さを実感するために振り返りをそれぞれ設け、子どもたちが協働することの良さを実感できるような授業展開にした。本時では、L字型の求積時に用いた見方・考え方を活用して複合図形をつくるという課題を与えた。

本実践では、課題を理解できていなかった子が多かったため、課題に対して自分の考えを持つことができた人は少なかった。また、誰とでも協働して良いという機会を与えることで、子どもたちが他者の考え方を得られたことは分かったが、それが自分の理解を深めることにはつながらなかった。協働することによって得られる良さや、それを実感したのかを評価する方法には、課題が残った。

今回は、協働する場を設け、答えが多様に出る課題を提示すれば、その良さを子どもたちが感じることができるという短絡的な考えで授業を行ってしまった。実際には、場の設定や提示する課題内容、教師の声掛けなど、子どもたちに協働する良さを実感させるための教師の手立てを検討していくことが、今後の課題となる。